豊かさを拾いに戻る

Venture fourth にまたまた素敵なお便りが届きました。
紹介します。

> お世話になります。うんうんと共感しながら拝読しました。
> 偶然ですが、冬休み、フィリピンのドゥマゲテに息子を連れて行きます。
> なんと、信頼できる友人に連れて行って頂きますので、私達親は同行しません。毎日、幸せな生活を溢れるくらい浴びていて、喉がカラカラで自分からしたくなる経験は、どんな環境下で起こるのか、時間の使い方を模索します。自分がいかに幸せで日本と何が違うか、何ができるか、文化の違いを見て感じて欲しいと願っています。初めてなので、私達も不安があります。良きアドバイスがありましたら、教えて下さい。

これは前々号の「あなたの夢はなんですか？」に向けてのお便りですね。
「喉がカラカラで自分からしたくなる体験」、とても印象的な表現だと感じました。
以前も書きましたが、現代はとても「便利」な時代となりました。
食べ放題、飲み放題、歌い放題、使い放題、定額、サブスク…
物だけではなく、あらゆるサービスが溢れている時代です。
でも、やっぱりそれは当たり前ではありません。
こうした「知」や「歴史」は誰かがつないであげないと、子どもたちはすっぽりと抜け落ちたまま大きくなっていきます。
それこそ、全ての物が「当たり前」だと感じながら。

学校を取り巻く状況も一昔前と大きく変わりました。
以前は、「学校」という場所で「教師」という立場にある人に尋ねないと分からなかった情報が、誰でもあっという間に手に入るようになりました。
今や、「ヘイシリ」「オッケーグーグル」で、幼稚園児でもいとも簡単に世界中の知にアクセスできる時代です。
全ての学校において子どもたちには一人一台のタブレット端末が配られ、情報のやり取りの在り方は一層早く、また多様になりました。
「膨大な情報にいつでもだれでも簡単にアクセスができる」。
これは一見とても「便利」の様に見えます。
そして、その「便利さ」を追求することが、「豊かさ」につながっていくと信じている人もまだ少なくないのかもしれません。
少し前までは、その図式が社会の至る所で通用していたからです。
しかし、それはやはり幻想なのだと思います。
「便利さ」と「豊かさ」はイコールの関係ではないからです。
むしろ、トレードオフの関係にすらある概念であると私は捉えています。
トレードオフとは、一方を求めると一方を失うという関係のこと。
便利さを追求し過ぎたあまり、その道中で数々の豊かさを落っことしているのが現代の特徴であるように思えてなりません。
私は、これからの時代は「便利さを追求する中で落としてきた豊かさを拾いに戻る」パラダイムにシフトしていくと思っています。
本来は私たちが持っていた「豊かさ」を、現代のテクノロジーの中において取り戻していく営みです。
その上においては、先のメッセージの中にあった「喉がカラカラになる」ような体験は極めて重要な意味を持つだろうと思います。
モノや情報が豊かすぎる時代だからこそ、あえて足りない場面を意図的に設定していく必要があるだろうということです。
「昔の暮らしに戻ろう」ということを言いたいのではありません。
「便利さ」を追求する中で見失った「豊かさ」があるのなら、そうしたことを見つめ直してみることは、現代においては取り分け大切な学びだと考えているということです。

１０年前、ＪＩＣＡからの派遣でカンボジアを訪問した時のことです。
首都プノンペンの小学校の子どもたちが、我々への歓迎の挨拶として、「涙そうそう」の演奏と歌を披露してくれたことがありました。
その子たちが演奏に使っている鍵盤ハーモニカは、日本から送られてきた中古品でした。
見るからにボロボロで、壊れて音程も狂っています。
それでも、子どもたちは楽しそうにその鍵盤ハーモニカを奏で、声高らかに歌っていました。
そこに、気恥ずかしさやためらいなどは微塵もありませんでした。
歌うことが楽しい、学ぶことが嬉しい、そんな思いを体いっぱいで表現しているように私の眼には映りました。
日本の学校現場では私が過去に一度も見たことの無い次元の、伸びやかで美しい姿でした。
今、その光景を思い出しただけでも胸が熱くなります。
日本から一緒に行った先生方はそれを聴いて、みんな滝のように涙しました。
可哀そうだとか、申し訳ないとか、そういう感情とは全く違います。
子どもたちがひたむきに生きる姿に、命を謳歌する喜びに溢れた姿に、ただただ心をわし掴まれたのでした。
日本にも、昔はそういう豊かさがあったはずです。
しかし、物やサービスが溢れ、便利さが増すほどに、そうした大切なものが失われていったのではないでしょうか。
訪問する前は、カンボジアという国に対して、自分たちに何ができるだろうかということばかりを考えていました。
開発途上国の中でも特に苦しい国だという印象があったからです。しかし、実際に訪れて感じたことは全く逆でした。
日本が物質的に豊かになる中で失ってしまったものが、カンボジアには確かにありました。訪問してたくさんの学びを与えてもらい、心を救ってもらったのは、むしろ自分の方だったと感じています。

先の、フィリピン一人旅に話を戻すと、私が同じ立場ならば、「日本では見つけにくい『幸せのカタチ』をたくさん見つけられるといいね」と言って送り出すのではないかと思います。

不便さの中にも確かに豊かさは存在するし、物が不足している中にあっても人はたくさんの喜びを生み出し、見出すことができる。

かつての日本がそうであったように。

そのような内容を伝えるために、きっとピッタリの話や事例を見つけてきて、見送る前にたくさん話してあげると思います。

お父さんの小さい頃はね、あるいはお母さんの小さい頃はね、と言って自分の小さい頃の話をするのもいいかもしれません。

おじいちゃんやおばあちゃんから話を聞くのも、これも非常に素敵な学びだと思います。

要は、日常の中に溢れている「有難い」を感じられる感性を磨き、決して「当たり前」ではない数々のストーリーを体験的に知ることが現代においては非常に大切だと思っているということです。

この夏も、私は各地で「感性を磨き、ストーリーを学ぼう」というテーマで講演を重ねてきました。

それくらい、今回いただいたお便りにあるような学びの重要性を、いち教育者として切実に感じています。

今回のフィリピンでの体験が、今後の人生における素敵な宝物になるといいですね。

お家の方にとっても大きな冒険だと思いますが、そのビッグチャレンジに私も心からのエールを贈りたいと思います。

また、その時のお話を聞かせてもらえるのを楽しみにしています。

尚、以前に勤めていた奈良の私立学校で、学校便りの余禄を担当していたことがあります。

その時に、私が人生で初めて一人旅を行ったときのことを記事に書いたことがあります。参考までに紹介します。

初めて一人旅をしたのは中学２年生の夏休みだった。

かつてのクラスメイトを訪ね、電車を乗り継ぎ青函トンネルを通って、岩手県へと向かった。

およそ 10 時間の道のりは、驚きと感動の連続だった。

車窓から眺めた人、物、自然、その全てが新鮮に映って見えたことをよく覚えている。

その友人と十数年ぶりに再会したのは一昨年のことだった。

時期は同じく夏休み。

東日本大震災後のボランティアに行った折のことだった。

小さい頃の思い出話に笑い、２人とも大して成長していない事実にまた笑った。そして、そんな風に他愛もない話が再び出来たことが、何よりも嬉しかった。

明日から 43 日間の長い休みが始まる。長期休暇だからこそできる経験がきっといくつもあることだろう。

様々な体験を通して、一回り大きくなった子どもたちに会う新学期を、心から楽しみにしている。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6lFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit